

久万高原町にあふれる山林資源

久万高原町の山々のほとんどは、杉・ヒノキの人工林である。町内で一年に生長する杉・ヒノキの材積は、松山市圏のみならず一年間に県内全域で建つ木造住宅をすべてまかなえるほどの量だ。

しかし、現在林業は壊滅的不況と言っている。現在の材価では、長年守り育ててきた費用や労力を回収する余地などない。それでも伐らなくてはならない。山を護るためだ。



特集 4

# 久万高原 木にこだわりの まちづくり

～地産地消の家づくり編～

木にこだわりのまちづくり  
研究アドバイザー

田中 豊嗣  
(久万高原町)



久万高原 地産地消の家づくり  
推進協議会 設立の会

木にこだわりのまちづくり



森林と住まいを結ぶ木だわり塾 林業体験

このような中、町民が木のまちの一員である自覚・自信・自負を取り戻し、内部からまちを変えていくきっかけにした。久万高原町は「木にこだわりのまちづくり宣言」を行った。①木のまちとしての町並みづくり、②木造住宅建設促進、③久万材の利用推進の3つの視点から取り組みを始めた。

町内には農家林家が多く所有面積も小さいため、林業研究グループ(森林づくりの技術や経営改善、地

域づくりや交流など森林・林業にかかわる活動をする自主的なグループ)の手になる「育林技術体系」を指針として集約的林業を行ってきた。しかし事情は変わり、これらの木が求められることはほとんどなくなった。

一方、町内の大工・工務店もじり貧だ。プレカットされた木材で建前(上棟式)が終わってしまう家づくりは、長年培われた技や職人を否定する。中小の工務店は如何にクレームを減らすかで手一杯だ。

今こそ町の林家が生産した木材を町の製材が挽き、町の大工・工務店が家にする地産地消の家づくりが必要だ。地域の中で物やお金が回り、無駄な運送コストはかからず、地域の職人は喜ぶ。

町では、町産材を使用し町内の大工が建てる定住目的の住宅に対して、上限

百万円を補助する事業を実施している。2年目の今年も年度が始まる早々応募が集中した。

しかし問題もある。テレビで見る格好のいい住宅に魅せられた目には、地域工務店の家は野暮ったく映る。また補助の最低条件を満たしただけで、それ以外のどこにも木の家を感じさせない家もある。

### ■木と住まいの相談窓口プロジェクト

町が元気になるためには、まず木の家づくりを取り戻すことが肝要だ。「久万高原 木と住まいの相談窓口」では、都市圏域に向けて山の状況を訴え、木の家のよさを伝えるために「森林と住まいを結ぶ木だわり塾」を月一回松山市内で開催している。ときには町までバスで招いて山の現状を体験していただいたりもする。

久万地方では、他地域より林齢が進んでいるため、梁・桁材の供給が可能だ。そこで窓口プロジェクトでは「久万高原の家」と銘打った久万材100%のプロトタイプ住宅を設計した。設計の簡易化、製材品の共通化を図れるように工夫されている。

林家が伐った木を製材が挽き、そのそばで大工が人間プレカットする（大型自動機械に頼らず、大工が空き時間を使い簡易な機械のみを利用して伝統の手刻みを行うプレカット工場）：といった一貫した生産体制をとることで、町が一体となつ

町内工務店による  
久万材100%住宅



提唱していく  
久万高原の家  
フレーム



て都市圏域に向けてフレーム供給している。部屋割りなどに自由が利く田の字フレームとしているため、外装・内装、屋根などは都市部の大工・工務店にお任せだ。つまり木の町全体がプレカット工場になるうという構想だ。

### ■地産地消の家づくり推進協議会と「媛の家」構想

このために、林業研究グループ、製材業協同組合、広域森林組合、建築士会支部、これらが一体となつて「久万高原地産地消の家づくり推進協議会」を設立することに合意した。今後はこの協議会が主体となつてこれらの構想を実現して行く。久万林業ならではの、枝打ちされた目込

みの良質材、磨丸太などの銘木、桁丸太、そして何より梁桁材。これらを県内で不足する地域へ供給して行くことも必要だ。県内産地がお互いを補完し合うネットワークで、「久万高原の家」から「媛の家」へ。県産材100%のフレーム設計手法を確立し、新しい木の家づくりの手法を久万高原町から提唱していきたい。

### ■これからが本番

まちづくりは人づくり。これからの木のまちを維持していくには、もっと若い力が必要だ。木のまちとしての若い人材育成が大事になってくる。林業だけではなく、製材・大工のスペシャリストを養成する仕組みも必要だ。

町内にある高校には、是非、木造建築に携わる人間を育てて欲しい。また人間プレカット工場は、職人が育っていく大工学校としても機能できる。

ソフト、ハード両面から木にこだわりのまちづくりを行い、町民の意識改革とともに、名実ともに久万高原町は木のまちであるという認識を取り戻したい。

まだまだスタートラインに就いたばかりで、これからが本番というところ。協議会メンバー内の温度差や、全員が同じ方向を向く難しさはあるものの、木のまちが好きで元気を取り戻したいという希望がある限り、前に向けて進んでいけると考えている。